

常磐名津大夫芝居列伝

○ 家元の子孫を傳へたる
○ 今たしむる語ありたる

DATE

初代常磐名津志事大夫

初宮古路志事大夫後に曲豊名賀節と

起す。初代文字大夫の弟子寛保二年正月申村屋へ文字大夫の
フキとして始りて出勤せり。大芝居へ出始め。其の後も文字大夫の
フキとして芝居毎に出勤。延享四年師と共に宮古路と常磐名津と
改む。延享二年には文字大夫豊後縁七回忌進上京留守六月には
申村屋にタテと語る。明和六年師と不和を起し当時ナカシ語るとして
常公全くと出勤し居たりし初代造酒大夫と共に分離して豊名賀の
一派を起し、同年秋申村屋に「腕駕崩過」と語りたりと始めとして
其の後もしばし出勤。安永元年十一月申村屋興行を限りとして芝居
出勤なく同三年死歿す。

○ 續名声劇場談話、安永五年七月森田屋浄瑠璃「富士管巻」の条に
豊名賀志事大夫三回忌進善とあり、故に安永三年に死せりともり
推定せり。

初代常磐名津造酒大夫 後文賀

初代文字大夫の弟子。延享四年二月中村屋に始りて控出。同十一月
始りて三番目勤む。明和六年志事大夫と共に豊名賀を起して志事
フキと語る。安永四年九月申村屋に自らタテを語り。安永九年五月
申村屋「振野の正夢」に造酒大夫の名を弟子富士大夫に譲り文賀と
改名して後見となる。天明二年二月申村屋興行より以後は名を
而して同三年十一月には二女豊名賀造酒大夫常磐名津に今し
察するに同年中に死しりともり。名人なりしと云ふ。

3

□ 初代常磐津若太夫

姓朝日異国太夫

後々富士岡若太夫

始朝日異国太夫と云う。若狭掾に従いて寛延年間森田屋に
出勤せしことあり。後初代文字太夫の弟子となり常磐津若太夫
と改称し明和三年正月中村屋に太夫場を振了。此山と見よに
其後志事遣酒太夫に傳ふし所ありしか如し。其後自ら
夕テとなりて救回芝居出勤ありしか明和六年志事遣酒太夫の
豊后賀節を起すや前後して富士岡若太夫と改称して常磐津
了り分離す。此の富士岡は天明元年正月森田屋に若太夫出演後
は全く劇場出演なげしか此の當時若太夫の死と共に滅亡すに
至り。木挽所に住す。

4

□ 常磐津井筒太夫

まに 文字の都

其の芸歴不明なり。明和五年十一月森田屋に突如として夕テを語了
常磐津種彦は此の文字の都と云うと自らなりとあり。其後絶えて
芝居出勤す。

5

□ 初代常磐津仲太夫

宝暦十一年五月森田屋に、お花半也の道行の夕テを語了との芸歴
不明。恐らく化流に入りて文字太夫の弟子となりし人なりし
○ 常 宝暦十一年の所に文車の夕テありとあり。後年文車と改称せし
なり。

□ 常磐津左文字大夫

朝日名美大夫と云い、朝日若狭掾に属し、寛延頃、森田屋へ
出勤せし、文字大夫の弟子となり、左文字と改め、宝曆十一年五月
森田屋に仲大夫のワキとして出勤、沙留に在り。

□ 初代常磐津左名大夫

明和二年正月、中村屋に若大夫のワキに出勤、その後、若大夫に
従い出勤、明和六年十一月、中村屋に始り、初代文字大夫の
ナカレになり、引續き出勤せし、安永三年十一月には初代兼大夫の
ワキと諱り、天明元年二月、中村屋出浪後、その名をなし、その位置は
兼大夫の次位、天明元年死去の日は酒落本、富賀山拜見の
記より見ゆ。

□ 常磐津湊大夫

明和二年正月、中村屋に若大夫のナカレと勤りて、その後、若大夫
に従いし、明和六年、若大夫富士岡を起し、その名を思ふれば、
改名し、その隠退し、その名を思ふべし。

□ 常磐津都名大夫

明和四年七月、市村屋に若大夫のワキを諱り、その時のナカレは湊大夫
の弟、信守も一格上なりし、その後、若大夫に従い、富士岡に入ら
ず、明和六年十一月、森田屋にワキを諱り、その後、名見之す。

10 □常磐津百合大夫

明和六年春中村屋に若大夫がナカレ

11 □豊名賀春大夫

初代文字大夫の弟子。明和六年二月造酒大夫と共に破内せられ
豊名賀正樹と一し。明和六年秋中村屋に出勤せし時ナカレと
勤む。其の後に西三回出勤す。

12 □富士岡初大夫

若大夫の弟子。明和七年十一月森田屋に若大夫がナカレ

13 □富士岡曾根大夫

安永元年七月森田屋に若大夫がナカレ。その後も若大夫に従い出勤

14 □富士岡三輪大夫

安永元年七月森田屋に若大夫がナカレ。その後一回

15 □富士岡名尾大夫

安永三年八月森田屋に若大夫がナカレ

16 □富士岡豊大夫

天明元年森田屋に若大夫がナカレ

